

# 上 竹・云 光

平成3年度県営畠地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1992

塩尻市教育委員会

## 序

上竹・云光両遺跡は奈良井川左岸の河岸段丘上にあり、以前より縄文時代から中世に至る遺物が採集され、よく知られていました。このたび県営畠地帯総合土地改良事業がこの地域に入り、遺跡の一部が破壊されることになったため、埋蔵文化財保護の立場から市教育委員会に緊急発掘調査が委託されたものであります。

発掘調査は秋本番の10月に行なわれ、おかげをもちまして好天気と地元の方々の深い御理解にも恵まれて作業も順調に進み、数多くの貴重な成果をおさめることができました。

終わりにあたり、本調査が無事完了できましたことは、県営畠地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区第4工区実行委員会の原郁郎氏をはじめ、役員・地権者の方々並びに地元の方々の深い御理解と御援助によるものであり、ここに衷心より敬意と感謝をささげる次第であります。

平成4年1月

塩尻市教育委員会

教育長 平出友伯

---

### 例 言

---

1. 本書は、塩尻市教育委員会が長野県松本地方事務所より委託を受けた平成3年度畠地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 現場での発掘調査は平成3年10月8日から28日まで実施し、遺物および記録類の整理作業から報告書作成は平出遺跡考古博物館において平成3年11月から平成4年2月まで行なった。
3. 本書の執筆は第III章第2節の遺物を小林が、それ以外を鳥羽がそれぞれ分担した。
4. 出土品・諸記録は平出遺跡考古博物館で保管している。

# 目 次

序	
例 言	
第Ⅰ章 調査状況	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査日誌	2
第4節 遺跡の状況と面積	3
第Ⅱ章 遺跡周辺の環境	4
第Ⅲ章 調査結果	7
第1節 調査概要	7
第2節 遺物と遺物	7
第Ⅳ章 結 語	19

# 第Ⅰ章 調査経過

## 第1節 調査にいたる経過

昭和38年から開始された県営畑地帯総合土地改良事業は、順次工事が進められ昭和47年からは塩尻市地域が対象地区となり、さらに桔梗ヶ原地区も昭和60年に事業認定され、具体的な工事が進められることになった。こうした状況の中で、平成3年度に事業が施工される第4工区の洗馬上組地籍の事業地域内に、上竹・云光の両遺跡が含まれており、遺跡の一部がかかることになった。このため塩尻市教育委員会は長野県教育委員会と事業主体である松本地方事務所、市耕地林務課と協議を重ね、工事施工前に緊急発掘調査を実施して記録保存をはかることとした。発掘時期については畑の耕作が終了する10月頃実施することにした。

平成2年9月12日 長野県教育委員会、松本地方事務所、市耕地林務課、市教育委員会により、調査対象箇所の現地協議。

平成3年8月20日 松本地方事務所、市耕地林務課、市教育委員会により、委託契約および調査日程等の打合せ。

10月1日 埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について松本地方事務所と委託契約締結。

10月1日 埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について市耕地林務課と委託契約締結。

10月8日～10月28日 現場における発掘調査を実施。

11月1日 発掘調査終了届の提出。

11月1日 埋蔵文化財拾得届の提出。

11月21日 埋蔵物の文化財認定について通知。

## 第2節 調査体制

団長 平出友伯（塩尻市教育長）

担当者 烏羽嘉彦（日本考古学協会員・市教委）

調査員 小林康男（日本考古学協会員・市教委）

市川二三夫（長野県考古学会员）

参加者 小沢甲子郎 小松幸美 小松義丸 清水年男 高橋鳥飼 高橋阿や子

中野久行 藤松謙一 山口仲司 小松貞文 大和廣由上はるみ

宮沢ち江子 原昌子 山崎千穂 上野正己 宮本恒雄 宮崎秀賢

熊谷千江子 大槻とめの 三平英樹 松島まつ子 上條スミ江 小松礼子

手塚きくへ 中村ふき子 古厩馨子

事務局	市教委総合文化センター所長	武居範治
	〃 文化教養担当課長	横山哲宣
	〃 文化教養担当副主幹	大和清志
	〃 平出遺跡考古博物館長	小林康男
	〃 平出遺跡考古博物館学芸員	鳥羽嘉彦
協力者	県営畠地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区第4工区実行委員会	
	〃	工区長 上條卯太郎
	〃	副工区長 清水三善
	〃	〃 原郁郎
	〃	畠かん部会長 南原今朝家
	〃	畠かん部員 伊藤福次郎
	〃	〃 山崎三津男
	〃	〃 原敬道
	〃	用地補償部員 山崎康生
	〃	〃 征矢野次夫
地権者	伊藤睦男 下平みつ子 下平睦範 伊藤福次郎 南原英俊 山崎 豊 大和成明 原 敬道 原 政則 小出 厚 南原光晴	

### 第3節 調査日誌

- 平成3年10月8日（火）雨のち曇 小林博物館長より挨拶、鳥羽調査担当より概要説明があり、終了後、テント設営。この頃から雨が止む。Aトレンチ掘り下げ。
- 10月9日（水）雨天中止。
- 10月10日（木）定休日。
- 10月11日（金）小雨 Aトレンチ掘り下げ。
- 10月12日（土）曇 Aトレンチ掘り下げ。A-7・8区で第1号住居址検出。西側にカマドを伴う。セクション図化、写真撮影、平面図測図。Bトレンチ掘り下げ。
- 10月13日（日）定休日。
- 10月14日（月）晴 Aトレンチ全体写真、埋め戻し。B～Dトレンチ掘り下げ。
- 10月15日（火）晴 B～Dトレンチ掘り下げ。Bトレンチ写真撮影、埋め戻し。
- 10月16日（水）曇 C～Eトレンチ掘り下げ。D-19区で第2号住居址検出。写真撮影、平面図測図。Eトレンチ写真撮影。埋め戻し。
- 10月17日（木）小雨 D・F・Gトレンチ掘り下げ。
- 10月18日（金）晴 Cトレンチ埋め戻し。D・F・Gトレンチ掘り下げ。

- 10月19日（土）晴 D・F～Jトレンチ掘り下げ。D-14・15区で第3号住居址検出。写真撮影、平面図測図。Dトレンチ写真撮影。Fトレンチ写真撮影、埋め戻し。Gトレンチ写真撮影。
- 10月20日（日）定休日。
- 10月21日（月）晴 Dトレンチ埋め戻し。H～Jトレンチ掘り下げ。
- 10月22日（火）晴 Gトレンチ埋め戻し。H～Kトレンチ掘り下げ。
- 10月23日（水）晴 Hトレンチ、第4・5号住居址・小豎穴掘り下げ。Iトレンチ、第6号住居址実測・写真撮影、埋め戻し。Jトレンチ写真撮影、埋め戻し。K・Lトレンチ掘り下げ。
- 10月24日（木）晴 Hトレンチ、第4・5号住居址および小豎穴の実測・写真撮影。全体写真、埋め戻し。K・Lトレンチ掘り下げ。
- 10月25日（金）雨天中止。
- 10月26日（土）晴 K・Lトレンチ掘り下げ。
- 10月27日（日）定休日。
- 10月28日（月）晴 K・Lトレンチ写真撮影、埋め戻し。器材片付け。本日をもって現場作業を終了する。

整理作業は10月～2月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土遺物の洗浄、注記、復元作業、実測図作成、作成図面の整理・製図・図版作成を行なう。報告書の原稿執筆も併行して実施する。

#### 第4節 遺跡の状況と面積

遺跡名	場所	現況	種類	全体面積	事業対象面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
上竹	塙尻市大字洗馬 1984-1番地外	畠	散布地	m <sup>2</sup> 28.000	m <sup>2</sup> 750	m <sup>2</sup> 360	m <sup>2</sup> 376.0	円 2,400,000
云光	塙尻市大字洗馬 1998-1番地外	畠	散布地	m <sup>2</sup> 8.000			m <sup>2</sup> 99.1	

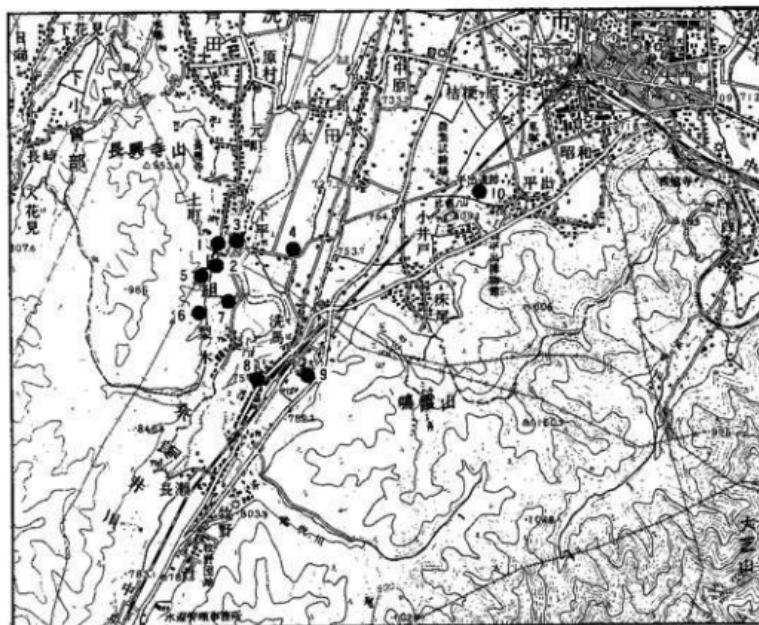
第1表 発掘調査経過表

月 遺跡名	10	11～2	主な遺構	主な遺物
上竹	8 28 発掘調査	遺物整理 図面作成 原稿執筆	縄文時代 前期末～中期初葉住居址 3 平安時代 住居址 3 小豎穴 3	縄文時代 前期末～中期初葉土器・石器 平安時代 土師器・灰釉陶器・鉄器
云光			な し	縄文時代 中期中葉土器・石器 平安時代 土師器 中世 内耳土器

## 第II章 遺跡周辺の環境

上竹・云光の両遺跡は塩尻市洗馬上組地籍にあり、奈良井川左岸段丘上に立地する。ここは奈良井川が木曽谷から松本平へ流れ出す出口にあたり、押し出された土砂が、その後の地盤隆起により段丘地形となっている。このうち左岸の高位段丘にあたる芦ノ田面は、大門市街地を乗せる右岸の桔梗ヶ原面と対しておらず、妙義山系がすぐ背後に迫っているため、僅かな幅を維持しながら川沿いに延びている。洗馬小学校をはじめ、芦ノ田・元町・上組の各集落の中心部がこの段丘面上に存在する。

上竹・云光遺跡はこの段丘面の最南端、すなわち上組の熊野三社の南側にあり、奈良井川に向かって張り出すテラス状の段丘面に広がっている。南側には三ッ谷と呼ばれる2つの沢によって開拓された谷があり、また北側にも現在の東京電力の電線が頭上を通る箇所で大雨時のみ出現する唐沢という小流がある。遺跡はこの唐沢を境として、南側の三ッ谷までを上竹遺跡とし、また北側の熊野三社入口付近までを云光遺跡としている。

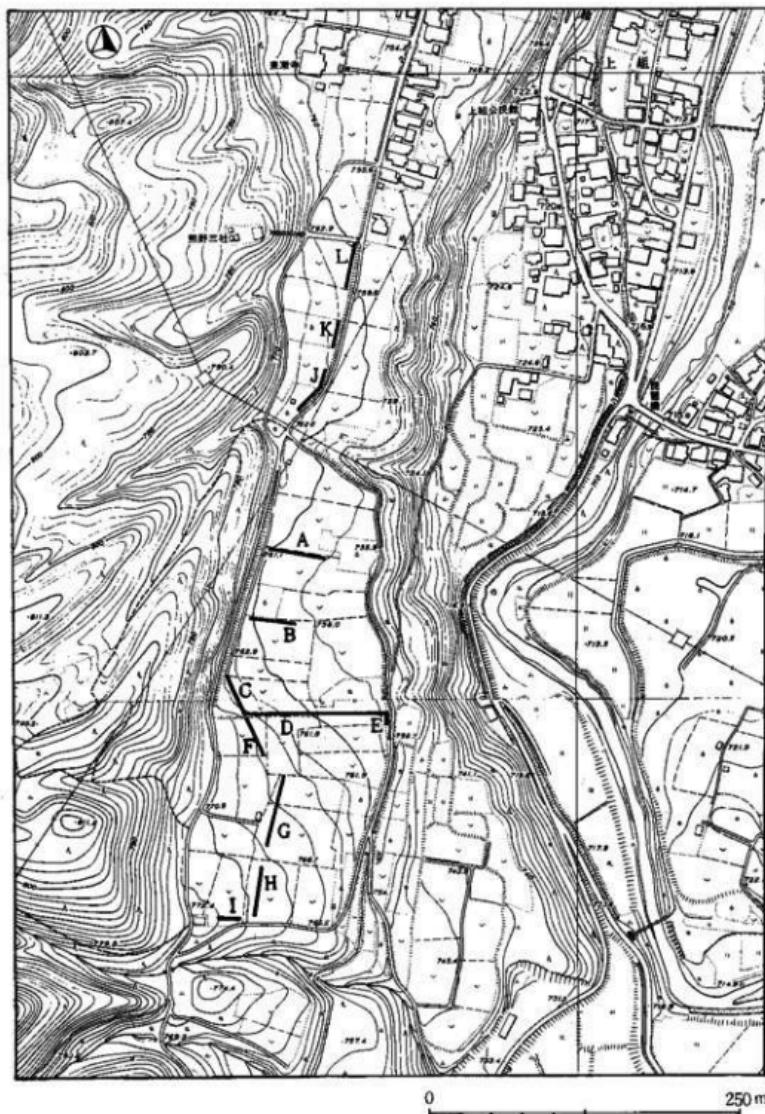


1:50,000

1000 M 5 1000 2000 3000

1. 云光 2. 上竹 3. 下平 4. 窶懸橋  
5. 滝沢 6. 薬師堂 7. 梨ノ木 8. 洗馬宿裏  
9. 小畠田 10. 平出

第1図 位置図



第2図 調査地区図

微地形的には上竹遺跡のほぼ中央部に、テラスを横切る窪地帯があり、壠鉢状の全容を呈する。このため上竹遺跡では中央部への表土の押し出しが進み、表土の厚さは南北両端で10数cm、中央部で150cm以上という極端な差異が生じている。

云光遺跡については、唐沢寄りの南側が最も高く、北東へ向かって緩く傾斜している。北側一帯にかなり砂礫層が分布していることから、遺跡の中心は南側のかなり狭い範囲に限定されるとと思われる。

上竹・云光遺跡は奈良井川流域に立地する多くの遺跡の一つである。

上竹・云光遺跡から西に小さな尾根を越えた場所にある潤沢遺跡は、縄文前期諸磯a・b・c・十三菩提式土器・石鎌・石匙・打製石斧・土製糀状耳飾が出土している。上竹6号住居と同時期の遺跡であり、その関連性が注目される。また遺跡の南の同一段丘上には、石鎌・スクレイバーを出土する薬師免遺跡がある。

上竹・云光遺跡の立地する段丘より一段下の中位段丘に栗ノ木遺跡がある。上竹遺跡方面からの道路建設の際、その断面に堅穴住居の落ち込みが確認されている。この落ち込みからは古墳時代の高坏が採集されている。このほかに縄文中期～後期の土器、石鎌も出土している。なお、同じ中位段丘上には、平安時代のおろし皿を出土した下平遺跡がある。

これら奈良井川右岸にある遺跡と対峙する遺跡群として琵琶橋・洗馬宿裏・小怒田遺跡等がある。琵琶橋遺跡は奈良井川右岸土地改良事業工事中に発見され、縄文中期後葉と弥生後期の土器が採集されている。

洗馬宿の西側に位置する洗馬宿裏遺跡からは縄文中期末の土器とともに綠泥片岩製の石劍が得られている。宗賀小学校の南側を中心に広範囲にわたって展開する小怒田遺跡では、縄文土器・打製石斧・平安時代の土師器鉢釜・須恵器甕・灰釉陶器長頸瓶が出土している。

## 第III章 調査結果

### 第1節 調査概要

上竹・云光の両遺跡は、塩尻市の西部、洗馬上組地籍にあり、奈良井川左岸のテラス状河岸段丘面に立地する。今回の発掘調査は、平成3年度県営畑地総合土地改良事業桔梗ヶ原地区に伴う灌漑配水管敷設工事に先行して、配水管の場所に沿って幅1mのトレンチを設定して実施され、上竹遺跡側でA～Iトレンチ、云光遺跡側でJ～Lトレンチの計12本、全長475.1m、発掘調査面積475.1m<sup>2</sup>にわたって行なわれた。各トレンチの長さについては次のとおりである。

Aトレンチ	44.6m	Bトレンチ	37.2m	Cトレンチ	34.6m
Dトレンチ	105.0m	Eトレンチ	10.0m	Fトレンチ	31.7m
Gトレンチ	57.9m	Hトレンチ	39.0m	Iトレンチ	16.0m
Jトレンチ	39.0m	Kトレンチ	23.3m	Lトレンチ	36.8m

調査によって検出された遺構は、縄文時代前期末～中期初頭の住居址3軒（Dトレンチ2、Iトレンチ1）、平安時代の住居址3軒（Aトレンチ1、Hトレンチ2）、小竪穴3基（Hトレンチ）で、これらはいずれも上竹遺跡からの発見であり、云光遺跡からは皆無であった。

出土遺物としては、上竹遺跡では、縄文時代前期末土器（晴ヶ峯・十三菩提併行）、前期末関西系土器、中期初頭土器（梨久保併行）、平安時代土師器壊・甕・灰釉陶器壠・皿・打製石斧・石鎌・凹石・不明鉄器が出土している。また云光遺跡では、縄文時代中期中葉土器・晩期甕・平安時代土器壊・中世内耳土器・打製石斧が出土している。

### 第2節 遺構・遺物

#### (1) Aトレンチ

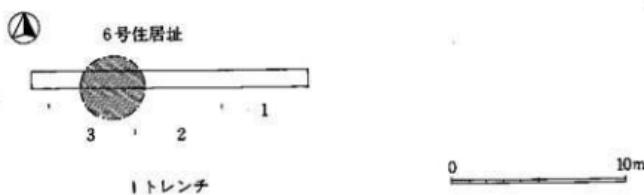
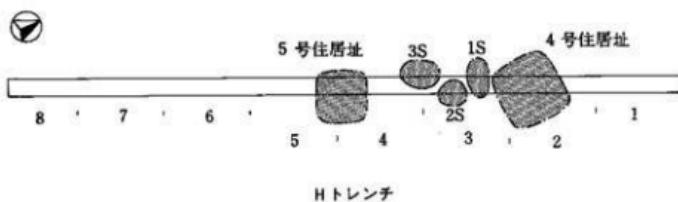
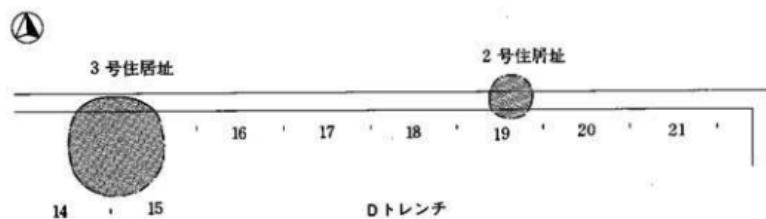
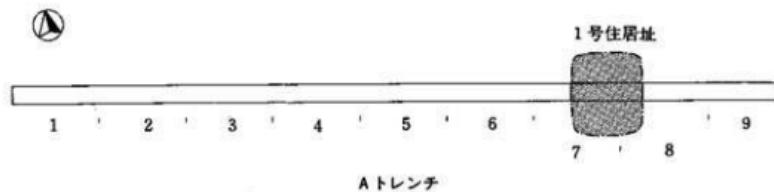
上竹遺跡では最も北側に位置する東西トレンチである。西端付近は西側の道との段差があるため、ローム面まで80cmと深いが、その他は40cmと一定している。

遺構はトレンチ東端から9m西側に第1号住居址が検出された。またトレンチのほぼ中央に上幅2m、底幅80cmの溝が横切っていたが、性格については不明である。

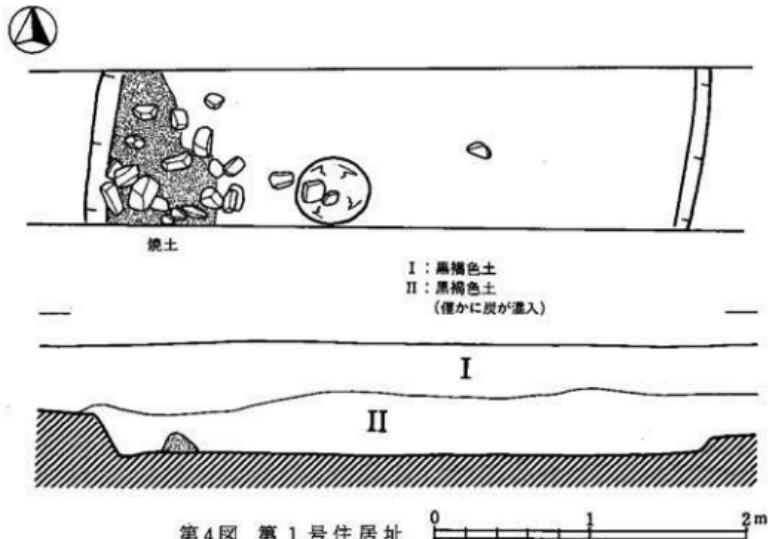
遺物は、第1号住居址出土のものほかには縄文中期土器片・土師器壊・甕・黒色土器・須恵器・灰釉陶器皿・壠の小片が出土している。石器には、図37・44の打製石斧2点がある。

#### 第1号住居址

カマドの位置から住居址のほぼ中央にトレンチがかかったと思われる。掘り下げの段階で覆土中に炭が混じっており、また土師器や灰釉陶器の破片が出土したことから住居址の存在が予想さ



第3図 ドレンチ全体図(遺構が検出されたドレンチ)



第4図 第1号住居址

0 1 2m

れていた。遺存壁の在り方より推して方形に属する平面形態を呈すると考えられ、規模は東西で390cmを測る。西壁で24cm、東壁で12cmの壁高をそれぞれもち、ほぼ垂直にきれいに掘り込まれている。壁高の違いは検出面の高さにあり、周囲の状況から判断して東側が耕作等により、かなり削平されたものとみられる。床面は平坦で、よく踏み固められて堅緻である。カマドは西壁に石組み粘土カマドが構築されており、礫は多少崩壊しているが遺存状態は良い。焼土・灰が厚く堆積しており、23cmの層厚を測る。床面上ではカマドの前に深さ19cmの播鉢状のピットが検出されたのみで、柱穴や周溝等は検出されなかった。

遺物は、土師器壺・甕・灰釉陶器皿・塊が出土している。量的には少なく、図化できたものは図1～3の3点である。1・2は灰釉陶器塊、3は段皿である。本址は平安時代7世紀に比定できる。

## (2) Bトレンチ

AトレンチとCトレンチのほぼ中間に位置する東西方向のトレンチである。実際の配管の長さは80mであるが、耕作物との関係で西側半分の調査となった。ここは現在表流水は流れていないが、地形的に凹地帯となっており、周囲と比べて最も低い。このため表土の流れ込みが著しく、ローム面までは今回の調査範囲の中では最も深く135cmを測る。掘り下げを始めた当初、遺物の出土量が多かったため遺構の存在が期待されたが、結局、遺構は検出されなかった。遺物はすべて地形的に上方からの流れ込みと思われる。

遺物には、土師器壺・甕・内耳土器・陶器片と、図40・41の打製石斧が得られている。

### (3) Cトレンチ

Bトレンチの南約50mのところで、北から真っすぐ道沿いに降りてきた配管は、南東方向へ折れ曲がり畑の中へ入っていくが、その最初の畑にかかるトレンチである。ここはローム面の傾斜が北へ向かって著しく、南端で22cmと浅いが、北へ向かって徐々に深くなり、北端では130cmを測る。表土の堆積は整然としており、急激な変化はみられない。北端の最深部では打製石斧3点をはじめ多少遺物が出土したが、遺構はみられず、おそらく斜面上方からの流れ込みと思われる。

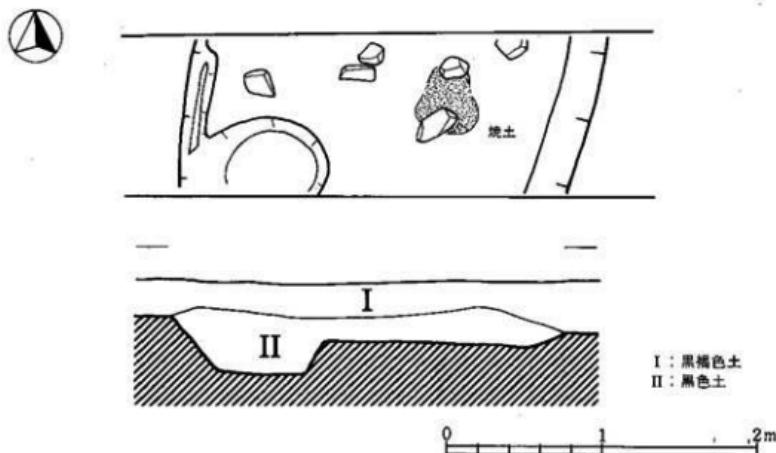
出土した打製石斧は、図38・39・43の3点である。38・43は撥形、39は短冊形で、43は部厚く重量感があり、両側縁中央部に顕著な磨耗痕がみられる。

### (4) Dトレンチ

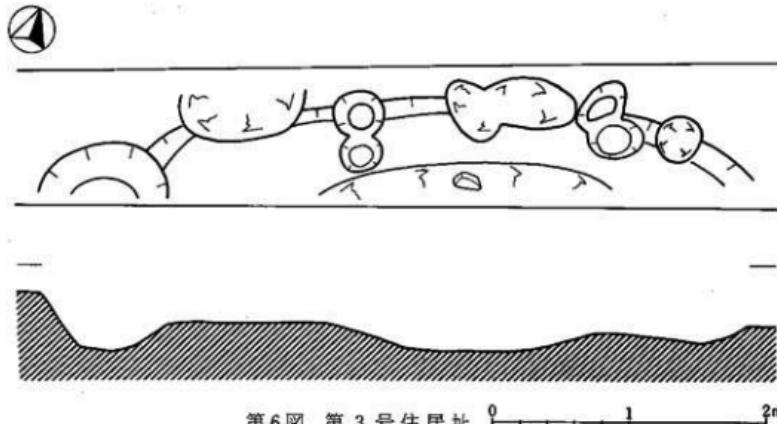
Cトレンチの南端から真っすぐ東へ延びるトレンチで、本調査の中では最長のトレンチである。ローム面までは西端で20cm、中央で60cm、東端で30cmと中央付近がやや深い。トレンチ全体を通して擾乱が随所に入っている。特に東半域の11~20区では著しい。

遺構については、トレンチ東側の地形的に低い箇所に縄文時代の竪穴住居址が2軒検出されており、東端から13m西側に第2号住居址が、またそこから更に20m西側に第3号住居址がある。

遺物には、縄文土器・土師器壺・甕・灰釉陶器皿・焼の小片および打製石斧が図42が出土している。



第5図 第2号住居址



第6図 第3号住居址 0 1 2m

### 第2号住居址

Dトレンチ東側のD-19区で検出された。遺構検出面までの表土が16cmと浅いため、掘り下げ当初から遺物や炭の出土がみられた。プランはトレンチに対してやや斜めになっており、形態は不明である。規模は東西で250cmと小形である。東壁で7cm、西壁で6cmと浅い掘り込みで構築されており、東壁は比較的緩やかな傾斜を有する。床面は凹凸が著しく、部分的に堅緻な箇所もみられるが絶じて堅くはない。床面やや東寄りに撲土の薄層がみとめられ、周囲に焼けた礫や炭が散在していた。おそらく炉の崩壊したものであろう。柱穴は検出されず、西壁沿いに深さ8cmの周溝が確認された。5図中の床面南西隅にあるピットは深さ21cmで、現代の攪乱跡と思われる。遺物には縄文土器小片が少量と、図36の打製石斧が1点出土している。

### 第3号住居址

トレンチ中央やや東寄りのD-14・15区に検出された。攪乱跡が著しく最後まで住居址の確認ができなかつたが、壁面が辛うじて繋がつたため住居址とした。トレンチには北壁部分のみがかかり、壁の在り方より推して円形もしくは梢円形の平面形態を有すると思われる。規模はトレンチ方向で5m以上の径が測られ、かなり大形の住居といえる。壁は12~16cmと浅く、掘り込みはなだらかである。床はよく踏み固められ堅緻である。中央寄りが更に16cmほど一段下がっているが、トレンチ外へ続いているため詳細は不明である。ピットは攪乱孔と紛らわしいため断定はできないが、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の2基が柱穴にあたるものと思われる。炉・周溝等の施設は確認できなかつた。遺物は、縄文土器の小片が少量出土したのみである。

### (5) Eトレンチ

Dトレンチの東端にある南北トレンチで、東側の道沿いにある。ここは表土が極めて薄く、ロ

ーム面までは最大でも20cmの深さを測るにすぎない。しかも搅乱が著しく、保存状態が極めて悪かったため、当初、配管部分の36.8mのトレンチを設定していたが、実際にはDトレンチ東端から南へ10m分だけ調査し終了した。遺構・遺物は何ら発見されなかった。

#### (6) Fトレンチ

Cトレンチ南端から、さらに真っすぐ延びるトレンチで、Gトレンチへ接続している。畑造成の際、トレンチのかかる東側へ土を押し出しているため、ローム面までは約50cmと深い。耕作によるためかローム面には、かなり凹凸がみられる。トレンチ中央付近に幅3m、深さ40cmの横鉢状を呈する溝が横断する。覆土が搅乱せず整然としており、また各層とも同比率で厚層となっているため、何らかの遺構の可能性もあるが、伴出遺物等がなく性格については不明である。トレンチ南端の7区で中世陶器が1片出土している。

#### (7) Gトレンチ

Fトレンチの延長上に南北に延びるトレンチで、南側の延長上にはHトレンチが存在する。本調査区の中では、Dトレンチに次いで長いトレンチである。付近は緩やかに傾斜する北斜面のため、表土が僅かずつ押し出ししており、ローム面までは北端で63cm、中央で48cm、南端で30cmと漸次減少している。この北斜面の下方にあたるDトレンチで住居址が発見されたため、より立地環境のよい本トレンチに調査前から期待がかけられていたが、全域にわたって耕作による搅乱がローム面まで及んでおり、遺構の発見はなかった。周囲のトレンチの状況から、おそらく元々は住居址の分布があったものと思われる。

遺物には、繩文中期土器・土師器・内耳土器の小片が出土している。

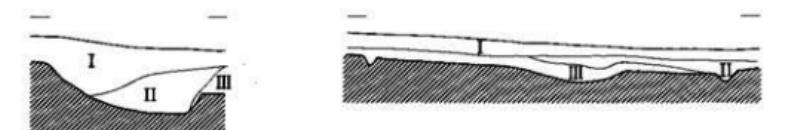
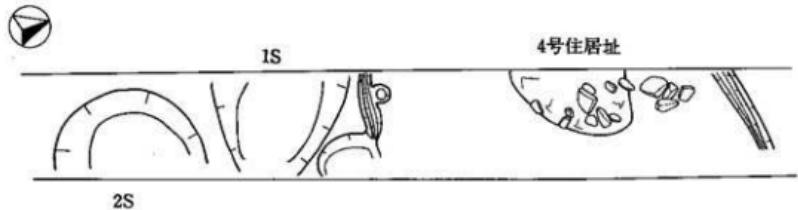
#### (8) Hトレンチ

Gトレンチの延長上にある南北トレンチで、南端からIトレンチが西方へ延びている。ここは調査区最南端の最も標高の高い場所にあたり、しかも南側に流れる沢沿いにあるところから、事前に行なわれた表面採集においても、Iトレンチが設定された一枚西側の畠とともに最も遺物が採集された箇所である。北側の斜面下方への表土の押し出しにより、ローム面は浅く全体を通して22~25cmと薄層である。

遺構はトレンチ北端から7mのところで第3号住居址が検出され、中央付近の20m地点で第4号住居址が検出された。また両住居址の間に3基の小堅穴が確認されている。これらの遺構の検出面は非常に浅かったが、耕作による搅乱はあまり及んでいなく比較的保存状態は良かった。

### 第4号住居址

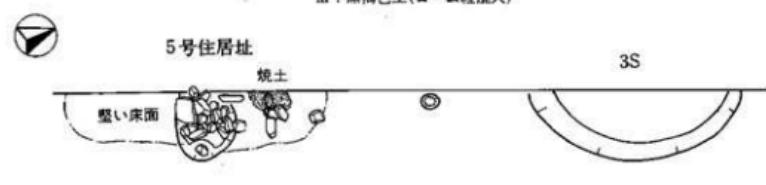
覆土が非常に浅いため掘り下げを開始した直後から遺物の出土があり、その後まもなくトレンチを横切る黒色土の落ち込みが検出され、住居址と判明した。カマドがトレンチ西壁際に確認さ



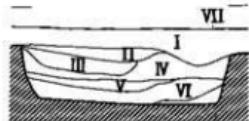
I : 黑褐色土    II : 嗜褐色土  
III : 游移層(ローム粒含む)



0 1 2 m



0 1 2 m



I : 茶褐色土    II : 黑褐色土    III : 烧土  
IV : 嗜褐色土(ローム粒混入)  
V : 茶褐色土(ローム粒混入)

I : 黑褐色土(ローム粒混入)  
II : 烧土  
III : 黑褐色土  
IV : 嗜褐色土(ローム粒多)  
V : 黑褐色土  
VI : 嗜褐色土  
VII : 黑色土

第7図 第4・5住居址(1~3号小窓穴)

れたことから、トレンチにかかったのは住居址の西側と推定される。壁方向はトレンチと斜交しており、N-45°E、隅丸方形の平面形態を呈すると思われる。壁はほぼ垂直な掘り込みとなっているが非常に浅く、北壁で3cm、南壁で4cmの壁高を測るにすぎない。壁面は堅敏で、やや北へ傾斜している。カマドは石組み粘土カマドで、西壁中央に構築されている。礫は北側へ崩壊しているが、表土が浅いわりには比較的まとまりがあり、保存状態は良い。掘り込みは約10cmで、焼土の堆積がみられる。周溝は北壁で10cm、南壁で4cmの深さを測る。

出土遺物には、土師器壺、図4、灰釉陶器壺5~7があり、ほかに混入と思われる縄文中期初頭の土器片がある。土師器壺は口径16.6、器高6.7cmのやや大形品である。

### 第5号住居址

トレンチ西側に焼土を伴う礫群が発見され、しかもその周囲が堅い床面状を呈していたため住居址とした。壁は検出されなかつたが、表土が非常に薄いため、おそらく削平されてしまったものと考えられる。住居址の規模・形態は不明であるが、床面と思われる堅敏なタタキ面は、南北2.7mにわたって広がっている。礫群の中には良く焼けたものが数個含まれており、また焼土も10cm厚の堆積になっていることから、カマドの崩壊したものとみてよいだろう。礫群の詰まっている掘り込みには焼土・炭等はみられず、深さは15cmを測る。

### 1号小竪穴

第4号住居址南隣に検出された。主軸方向の東西両端がトレンチから外れるため、全容は把握されないが、かなり大形のものである。南北140cm、深さ40cm、底面は平坦で、タライ状の断面を呈する。

### 2号小竪穴

1号小竪穴の南側に検出され、西側半分が確認された。ほぼ円形を呈すると思われ、径は150cmを測る。掘り込みは北壁がほぼ垂直、南壁が擂鉢状になだらかに立ち上がっている。出土遺物は図23~28・29の土器片がある。縄文中期初頭に属するものである。

### 3号小竪穴

2号小竪穴の南側に続き、第5号住居址の北側に位置する。東側半分が検出され、壁の在り方よりほぼ円形を呈すると思われる。規模は南北220cm、深さ56cm。掘り込みはほぼ垂直で底は平坦である。遺物は、図24・26・27の土器片がある。27は細隆起線文を有する関西系土器。縄文前期末から中期初頭に位置づけられる。

### (9) Iトレンチ

Hトレンチ南端から西へ延びるトレンチであり、Hトレンチが設定された畠の一段上に位置す

る。すぐ脇を道が併走しており、その向こうに沢筋を臨む。微地形的には東傾斜となっているが、傾斜が緩い分だけ表土の流出は少ない。ローム面までは東端で55cm、西端で41cmを測る。トレンチ掘り下げを開始した直後から縄文土器の出土が多く、複数住居址の存在も窺われたが、調査の結果、トレンチ西寄りに小形の住居址が1軒確認されたにとどまった。

#### 第6号住居址

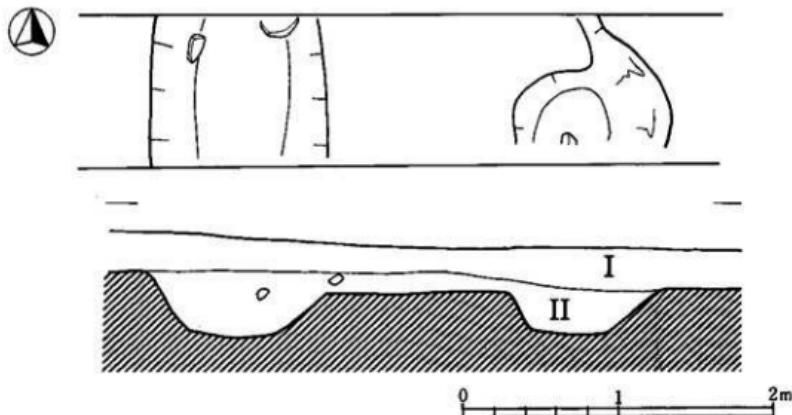
径3mの小形住居址であるが、トレンチはほぼ中央を横切っていると思われる。西壁下に溝状のものが掘り込まれており、かなり床面が狭くなっている。トレンチ内での状況だけではこの溝が本址に伴うものであるか否かは判断できない。掘り下げの段階から多量の縄文土器片が出土しているが、その半分はこの溝からの出土であり、残りは床面全域からのものである。壁は東壁北端にわずかに覗いており、壁高7cm、ほぼ垂直に掘り込まれている。検出面が東へ傾斜していることから西壁側へ漸次高くなっていくものと思われる。床面は凹凸が著しく、所々に堅い部分が残っている。なお東壁下にみられる振り込みは、住居より後の小竪穴と思われる。

出土遺物は、図8~22の土器片と、図35の石錐がある。8~10は半割竹管による平行条線にキザミを入れたもの。また12~16は沈線文を立体としたもので、17~19は縄文施文である。20~22は関西の大歳山式に類するもので、20・21は内屈する口縁部破片である。

本址は縄文前期末の十三苦提併行期と考えられる。

#### (10) Jトレンチ

云光遺跡の最も南に位置し、道に沿って途中折れ曲がったトレンチである。トレンチの南側は畠端までは25m程あるが、ここは以前東京電力の仮鉄塔を建てた場所で、すでに破壊されている



第8図 第6号住居址

ことが明確なため調査区から除外した。ローム面までは南側で42cm、中央の折れ曲がる付近では80cm、北側で50cmを測る。かなり土層が攪乱しており、保存状態は極めて悪い。北側の6区で径40cm、深さ46cmのものと、径37cm、深さ36cmのピットが2基検出されたが、遺構に伴うものであるかどうかは不明である。

出土遺物には、縄文前期末の十三菩提式土器小片と打製石斧図46、図31の内耳土器がある。内耳土器は、口径24.4cm、器高13.6cmで、内外面ともロクロ成形痕が著しい。外面全体に煤の付着が顕著である。

#### (11) Kトレンチ

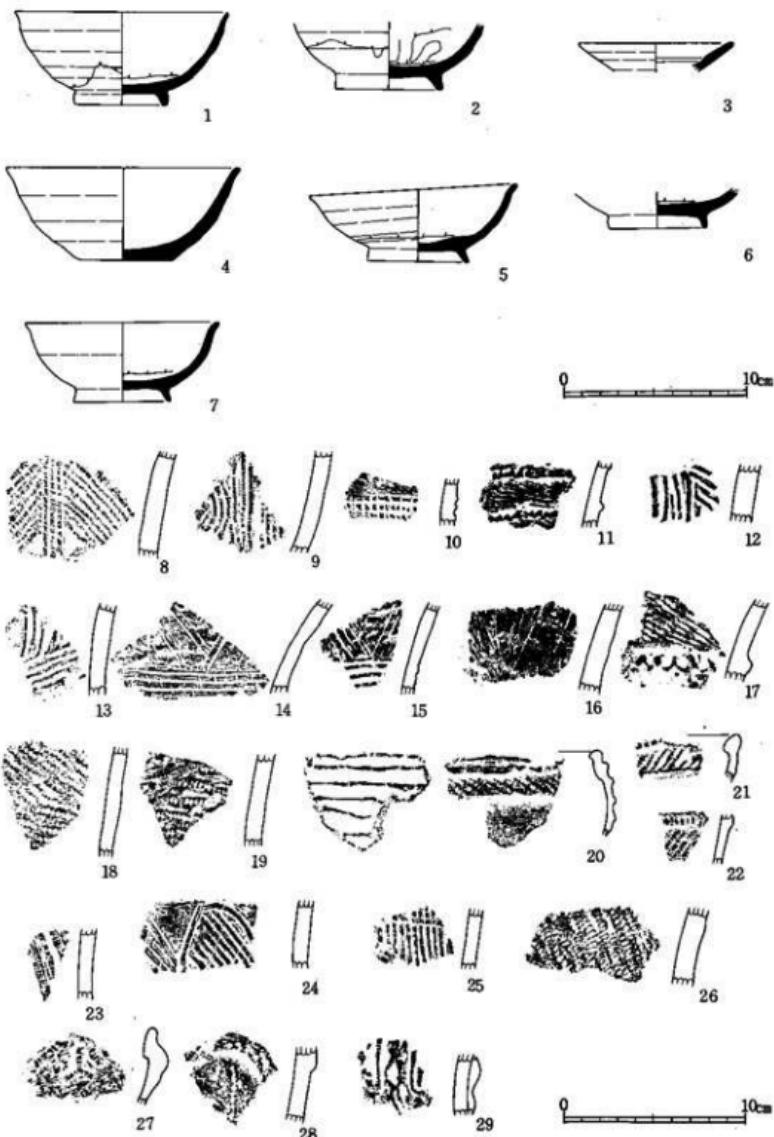
Jトレンチの延長にある南北トレンチである。微地形的にやや窪地になっているため、表土は周囲に比してやや厚く、南側で90cm、北側で80cmを測る。掘り下げを開始して間もなく遺物の出土が多く、深さ30cm位のレベルで一括資料も出土したことから表土は浅いと思われたが、その後、中位から下位にかけてはほとんど遺物の出土がなかった。

出土遺物には、縄文中期土器片図34、晚期土器図30、土師器坏・甕・内耳土器・打製石斧図45がある。晚期土器は、口径21.4cm、現存高23.7cmの深鉢形で、口唇部は面取りされ、器面は全面にわたり磨かれている。水式に属するものと考えられる。

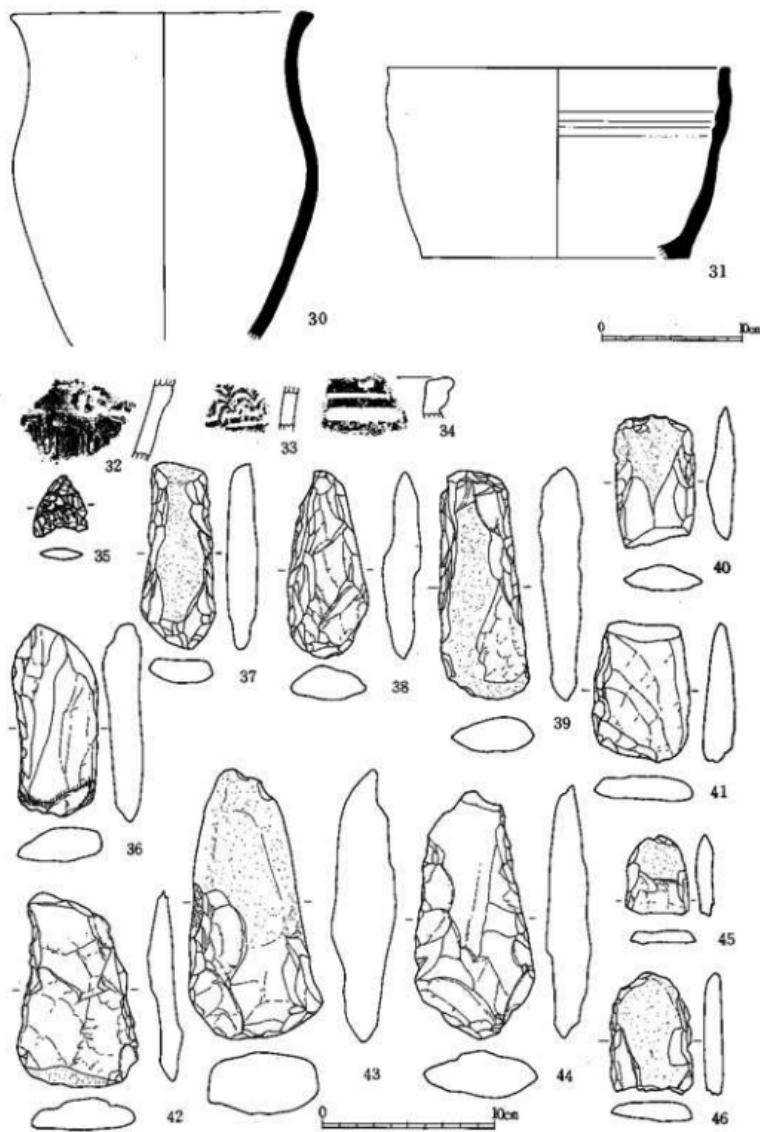
#### (12) Lトレンチ

神社入口の向かって左側の畝に設定された南北トレンチで、今回の調査で設定されたトレンチの中では最北部に位置する。表土は極めて砂礫質堅緻であって、作業に困難をきたした。約30cmの深さで茶褐色を呈する砂礫質ロームとなり、当初、この面が地山と思われたが、1ヶ所深掘りしたところ、このロームが60cm厚あり、25cmの黒色土を介して真性のローム面が露呈した。土層をみると頻繁な水流の影響がみとめられるが、付近の微地形は北東へ傾斜する尾根状地形となっており、現在の地形はかなり変化したものと思われる。

南端の1区で深さ70cmのところに60×40cm、深さ60cmのほぼ直方体を呈する孔が穿たれており、また中央の3・4区では深さ52cmの高さで、直径1mの範囲で炭の集中分布がみられた。いずれも共伴資料がなく、性格は不明である。Lトレンチからの出土遺物は、3区を中心にして縄文中期土器 図32・33、土師器・陶器片がある。いずれも小片で出土量も多くない。



第9図 出土遺物(1)



第10図 出土遺物(2)

## 第IV章 結語

市内の西半域を占める奈良井川・小曾部川流域は、東半域の田川流域とほぼ同規模の範囲を有しているにもかかわらず、遺跡数は驚くほど少ない。これについては、さまざまな理由が考えられるが、一つには奈良井川には河岸段丘が著しく発達しており、このため展望の開けない閉ざされた平坦地が多いこと、中位・高位段丘面では水利の確保にかなり困難をきたすことが考えられる。また山麓部から流下する小河川が少なく、たとえあっても山麓が急峻で距離が短かいため、遺跡立地に適当な舌状台地を形成しにくいことも理由として挙げられよう。他にも位置的なものや日照・植生・動物獲得など有機的な面で特性がみられ、それらが総合的に関与して遺跡数を減らしていると考えられる。

今回調査対象となった洗馬上組地籍も、この奈良井川左岸段丘面の最南端に位置しているが、比較的この付近だけは遺跡が密集しており、立地環境に恵まれていたものといえる。しかし、そのほとんどは僅かな遺物が採集されているにすぎず、ごく小規模な遺跡とみて差支えない。

このような中で、上竹・云光両遺跡の立地するテラスは奈良井川側へ大きく張り出しており、しかも幾筋もの沢がこのテラスを濁している。地形的にみても大集落を形成するに恰好の場所であることが窺え、発掘以前の分布調査の段階で、すでに大規模な集落址の存在がある程度予想されていた。

上竹遺跡での今回の大きな成果は、繩文前期末～中期初頭と平安時代の集落が確認されたことである。洗馬地区でこれまでに発掘調査された遺跡としては、岩垂山ノ神（繩文前期）・芦ノ田小段（繩文中期後半）の両遺跡があるが、時期的にはやや離れており、遺跡の動きを考えていくうえで重要な資料となろう。

云光遺跡については、分布調査などによりこれまででも中世を中心とした遺跡とされてきたが、今回の調査でもそれを追認する結果となった。残念ながら遺構は検出されなかつたが、市内でもあまり資料の得られない時期だけに貴重である。

発掘は1m幅のトレンチ掘りで、しかも遺跡全体の20%にも満たないが、幸いなことに多くの遺構・遺物にあたることができた。このことは、同時代の遺構がかなり大規模に展開していることを示唆するものであろう。将来の調査に期待するところ大なるものがある。

最後に、今回の調査遂行にあたり、地元関係者の皆様ならびに発掘に携わっていただいた方々に深く感謝申し上げます。



遺跡遠景（中央段丘面が調査地）



上竹遺跡から云光遺跡を望む

図版 2



云光遺跡から上竹遺跡を望む

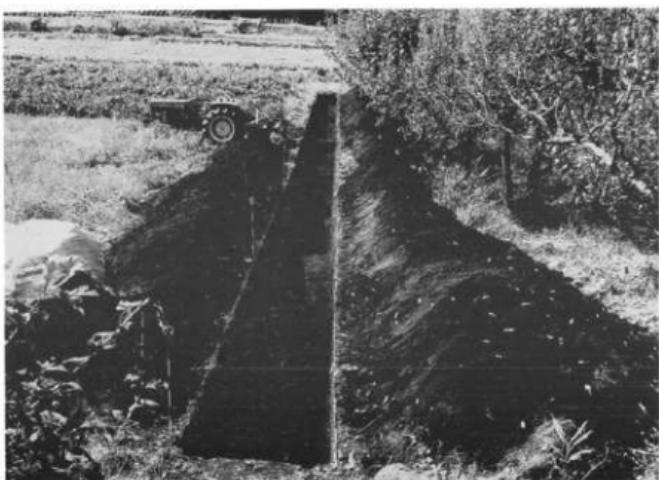


A トレンチ掘り下げ(西側から)

図版 3



第1号住居址 (Aトレンチ)



B トレンチ (西側から)

図版 4



D ドレンチ(西侧から)

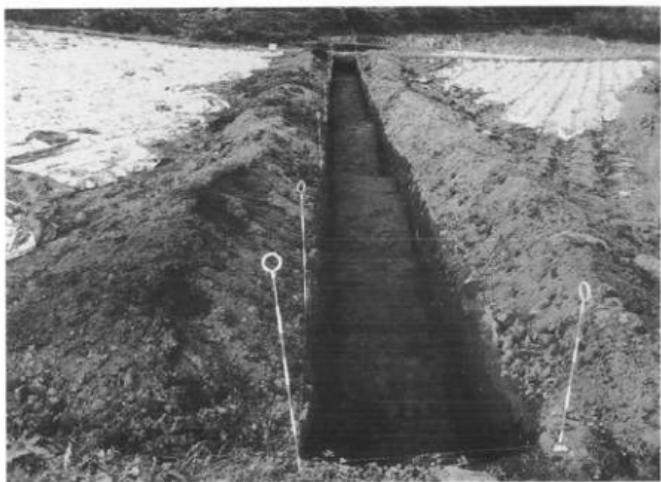


第2号住居址(Dドレンチ)

図版 5



第3号住居址(Dトレンチ)



Fトレンチ(南側から)

図版 6



G トレンチ (南側から)



H トレンチ掘り下げ (南側から)

図版 7



Hトレンチ(南側から)



第4号住居址(Hトレンチ)

図版 8



第5号住居址(Hトレンチ)



Iトレンチ(西側から)



第6号住居址(トレンチ)



Jトレンチ掘り下げ(南側から)

図版 10



J トレンチ(南側から)



L トレンチ(南側から)

---

---

## 『上 竹・云 光』

平成 3 年度県営畠地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区  
埋 藏 文 化 財 包 藏 地 発 掘 調 査 報 告 書

平成 4 年 3 月 21 日 印刷  
平成 4 年 3 月 23 日 発行

発行 塩尻市教育委員会  
印刷 (株)英巧堂印刷所

---

上  
竹  
云  
光